書評

三浦小太郎著
『信長 秀吉 家康はグローバリズムとどう戦ったのか』

下川　正晴（毎日新聞元ソウル特派員、論説委員）

本書は旧刊『秀吉はなぜバテレンを追放したのか』(2019、ハート出版）に、新たな書き下ろし２章を加えた普及版新書である。著者は現在、ウイグル人の人権擁護などで知られる「活動家」である。しかし彼の真価は同時に大変な読書家であり、思索家であることだと私は評価する。

前著を読んだのは、私が台湾史を基点に大航海時代の意味を再発見しつつある時期だった。彼が推奨したキリシタン史研究者・神田千里などの本を読み、その力量に感服した。

本書の趣旨はきわめて明快である。「はじめに」で三浦が「本書は渡辺京二の『バテレンの世紀』(新潮社）なくして生まれなかったものである」と明記している通りだ。

渡辺京二（1930－2020）は熊本市在住の思想史家。幕末・明治期における外国人の訪日を網羅した『逝きし世の面影』(1998、和辻哲郎文化賞）で有名だが、同時に、日本とロシア・アイヌの交渉史をテーマにした『黒船前夜』（2010、大佛次郎賞）、雑誌『選択』誌上で連載した『バテレンの世紀』(2017、読売文化賞）など、刮目すべき業績がある。

三浦は評伝『渡辺京二』（2016、言視社）を出版しており、最強の渡辺京二研究者の一人でもある。三浦によれば、渡辺は『バテレンの世紀』によって、「日本と西洋のファースト・インパクトというべき戦国時代のキリスト教伝来から鎖国までの歴史を、まるで森鴎外の歴史小説のように（中略）私たち読者の前によみがえらせた」のである。

三浦はその後、ルイス・フロイスの名著『日本史』を何度も再読し、神田千里（1949～、前東洋大学教授・男性）や藤木久志（1933－2019、立教大学名誉教授）を読み込み、「わが国の歴史学が着実に業績をあげている」(本書「はじめに」）ことを認識した。

三浦はなんとも率直である。「私自身にオリジナルな知見や思想はなにもない。できるのは、私なりに彼らの著書から学んだことを再構成することだけであった」と語る。

私は彼が本書で勧めてくれた文献のいくつかを読んだ。神田『島原の乱』(2005)、同『宗教で読む戦国時代』(2010)、藤木『雑兵たちの戦場・中世の傭兵と奴隷狩り』(2010）などは、特に感銘が深かった。そういった経過を踏まえて私は、本書は「卓抜な読書案内」であると断言したい。われわれ読者は三浦の書籍紹介を手がかりに、戦国史の意味を再把握する読書に旅立てばよいのだ。その時、三浦が本書で書き記したコメントの数々に、彼の思索力と歴史理解を認識させられることになる。

例えば、こういう一節。「日本人奴隷の姿は、秀吉が否定しようとした乱世の最悪の象徴であり、また日本国の指導者として屈辱であったろう」。三浦はこう評価しつつも、次のような一文を忘れない。「秀吉が特に民衆に同情的だったとか、奴隷制度に反対だった

などと思うのは幻想である。事実、朝鮮征伐の戦場では、朝鮮人が奴隷として日本に連行された記録もある」。このような周到な目配りが、三浦による歴史叙述の特徴でもある。

三浦は本書の中で、奈良静馬（1866－1947、主要著書『スペイン古文書を通じて見たる日本とフィリピン』）や、戦国時代の日本人奴隷売買の問題を先駆的に研究した岡本良知（1900－1972）のような、戦前期からの研究者の業績を再評価した。これも本書の大きな特徴である。

戦後史学の中で彼らの著書は忘れられた存在になっていた。しかし、戦前の帝国主義時代のさなかを生きた日本人研究者の問題意識は世界史的観点に立っており、戦後史学の左翼偏向から程遠い学術的な厚みがあるのだ。

私がルイス・フロイス『日本史』を初めて読んだのは、大分県立芸術文化短大に在職中の2010年前後だった。大分はキリシタン大名の大友宗麟の場所柄である。当時、観光振興の観点から、地元では「宗麟ブーム」が大分市役所などによって演出されていた。しかしフロイス『日本史』で描写された大友宗麟は、キリスト教に改宗して自滅した姿である。大分県民に意外なほど不人気な理由も理解できた。さらにフロイス『日本史』に登場する「豊後の日本人奴隷」の姿は驚嘆に値した。これは一体どういうことだったのか。

韓国史研究の視野の狭さに辟易した私は、数年前から、現地踏査を含めた台湾史研究を始めた。最初に行ったのが古都・台南だ。そこにはオランダ支配時代の遺跡ゼーランディア城が、台湾海峡を望む海辺にある。そこで展示資料を見ているうちに、オランダ人現地商館長とトラブルを起こした浜田弥兵衛の事績を知った。

弥兵衛は江戸初期の朱印船船長。寛永4年（1627年）、オランダ商館長を人質にし、幕府の支援を受けて、オランダに関税撤回を要求し成功した人物である。弥兵衛の名前は、戦前期までシャムの山田長政とともに日本人の記憶の中にあった。しかし戦後、台湾に国民党政権が進駐すると、ゼーランディア城にあった古跡は国民党政権によって改ざんされた。戦後日本の記憶喪失もあって、忘却された存在になっていた。

この経験を振り出しに台南と平戸の関係史などを調べ始めると、そこに浮かび上がったのは当時の東アジアの壮大な姿、すなわち大航海時代（戦国時代）の「第一次ウエスタンインパクト」だったのである。そしてタイミングよく著者本人から、旧刊『秀吉はなぜバテレンを追放したのか』の寄贈を受けた。

本書を再読してみて、著者の周到な叙述に改めて感心した。

第一章「中世という『乱暴狼藉』の時代」は、藤木の著書などを参照して、一世を風靡した網野史観を批判。神田の研究をベースに置いた一向一揆、天道思想に関する記述が興味深い。私が大分、台湾研究から関心を持った「平戸における神社仏閣との激突」（第三章）や大友宗麟の混迷（第四章）に関する記述は、とくに参考になった。第七章「世界に連れ去られた日本人奴隷たち」は圧巻である。そして「豊臣秀吉の伴天連追放令」「侵略に対する秀吉のアジア戦略」「宣教師による軍事侵略計画」と叙述は続き、きわめて説得力がある。

2018年夏、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」がユネスコの世界遺産に登録されたのも、本書の執筆の動機の一つだったという。私は平戸取材の中で、生月島の隠

れキリシタン信仰に関心を持った。

三浦は本書の最終章で、広野真嗣『消された信仰』（2017）を参照しながら、そこに天道思想とキリシタンの融合した姿があることを指摘している。石牟礼道子と鈴木重成（第13章島原の乱）に関する記述とともに、著者の沈潜した思索力を感じさせる部分である。

蛇足ながら、朝鮮史と大航海時代の関連について述べたい。

至極簡単に言えば、朝鮮史は日本のような大航海時代（第一次ウエスタンインパクト）を経験しなかった歴史だ。日本に鉄砲が伝来した当時、朝鮮半島では朱子学を教える書院が作られ始めた。それは朝鮮人儒者たちが「事大思想」を教え、学ぶ場所だった。

日本列島や台湾、沖縄は太平洋の荒波が襲う地政学上の位置にある。しかし、朝鮮半島は海洋史の発展とは程遠い場所にある。朝鮮が守旧主義の「静かな朝の国」であり続けた原因だ。朝鮮史はキリスト教の浸透（第一次西洋の衝撃）と帝国主義の到達（第二次西洋の衝撃）が、19世紀になって同時に起きた歴史なのである。その地政学的ハンディキャップが、朝鮮近代史の桎梏でもある。

『反日種族主義』で知られる韓国の経済史学者・李栄薫の主著である『韓国経済史Ⅰ』（須川英徳訳、2021）に、朝鮮の「海からの撤収」（閉ざされた海）に関する記述（282ページ）がある。引用して、拙稿を終えたい。三浦が描き出した大航海時代・戦国時代（キリスト教との熾烈な遭遇）の実相とは、百里の径庭があるのだ。

「明帝国の海からの撤収は、その後の東アジアの後退と西ヨーロッパの追い越しを予告する世界史的な事件だった」

「明は海における自由な通行を禁止した。明と朝鮮との使節往来は必ず陸路を用いた。朝鮮と中国のあいだの海を渡る船の姿は、壬辰倭乱にさいして明の軍隊が派遣された時期を除いて、使節であれ商人であれ、完全に途絶した」

「その海に再び航路が拓かれるのは、1882年に清国皇帝が海上貿易を許諾（朝清商民水陸貿易章程）してからのことである。近接する2つの陸地を結ぶ海で、ほぼ五百年近くも商船の往来を見なかったことは、世界のどの時代と地域においても類例を求めることが難しい奇異な事例といわざるをえない」

（ハート出版、2024年）